現存十二天守の城

犬山城

［愛知県犬山市］

木曽川のほとりで美濃をにらむ国盗りの要諦となった名城

美濃との国境である木曽川沿いに位置する尾張国犬山は、羽柴勢と織田・徳川勢が覇権を競った場所である。対岸からの雄姿が特に美しい国宝犬山城天守は、数多くの謎を秘めながらも日本史の転換点を今に伝える。

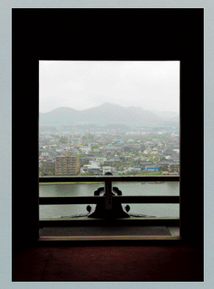
文◎秋川ゆか　撮影◎佐藤佳穂

城主が激しく入れ替わった戦国時代の犬山城

犬山城の別名を白帝城という。江戸時代の儒学者・荻生徂徠が、城の情景が李白の詩にある白帝城に似ていることを讃えて名付けたといわれる。望楼型三重四階の美しい天守が川のほとりに緑に包まれてそびえる姿は、確かに『三国志』の舞台となった古城を思わせなくもない。

木曽川を背にした後堅固の平山城である。こちら側は愛知（尾張）で対岸は岐阜（美濃）。国境に位置する犬山は、戦国時代には争奪が繰り返された国盗りの要所だった。

城の歴史は天文6年（1537）、織田信長の叔父にあたる織田信康が近くの木之下城を移したことに始まる。永禄8年（1565）には信長が奪い取り、池田恒興に与えたのち、信長の子・勝長が城主になった。次に城主が激しく入れ替わるのは天正12年（1584）の小牧・長久手の戦の時だ。織田信雄の家臣として犬山城を守った中川定成の伊勢出兵中を狙い、池田恒興が城を奪還、羽柴秀吉も入城する。しかし長久手で池田は戦死。この1年間で城主（城代）は実に4人も替わっている。



上／最上階の望楼では、現存天守として唯一、廻縁を一周できる。雨や強風の日は、高欄が低いため滑ると危険なので閉鎖。下／北側は木曽川を隔てて美濃国（現在は各務原市）。愛宕山や八木山、遠く御嶽山や岐阜城も見える。